

感染対策用病室について

1. 概要

陰陽圧調整可能な感染対策用病室（個室）を一般病棟に整備する。

2. 前回検討部会でのご意見等

感染対策用病室は、高額な設備が必要であり、何のために作るのかを明確にしておくべき。感染症病棟も関係なく、すべての病棟につくる必要があるのか。

3. 小児保健医療センターの現状

- (1) 空気感染する病気は麻疹（はしか）、水痘（水ぼうそう）、結核3つが代表的であり、現在、陰圧室がないために、これらの病気の人原則入院ができない状況。
- (2) 3つの感染症の内、小児保健医療センターでは特に水痘が問題。水痘は潜伏期間が長く、発症2日前から人にうつす力を持っており、病院内に持ち込まれやすい。
- (3) 免疫状態が悪い患者さんに感染すると重症化するため、入院中に発症した場合、発症者に退院をお願いすることや病棟内の他の入院患者への感染の可能性もあるため、当該病棟の入院を一定期間制限する必要がある。

4. 必要性

- (1) 陰圧室が整備されれば、感染症を発症していても入院が可能であり、入院中に発症した患者さんに退院をお願いする必要もなくなる。
- (2) 平成26年から定期接種となった水痘ワクチンを入院中に接種することもあるが、ワクチン接種後は陰圧室で管理することにより、水痘を発症した場合でも病棟内の入院患者への影響はない。
- (3) 院内で発症が確認された場合でも、速やかに陰圧室へ移ってもらうことで、周りの患者さんへの感染リスクを抑えることができる。

5. その他

- (1) 小児保健医療センターでは結核等の治療は行っておらず、空気感染で問題になる感染症は主に水痘であり、その対応には陰圧室が2、3室程度あれば可能。
- (2) 陰圧室に前室を設け、入退室時の手洗いや消毒、使用したマスク等の廃棄などをすることで、病棟内に感染が拡大するリスクは低い。

6. 他病院事例（公立こども病院）

（1） A病院（150床程度）

① 整備状況

内科系病棟とPICUに7部屋、外来診察室1部屋（うち3部屋は前室なし）

② その他

水痘、帯状疱疹への対応として整備

（2） B病院（200床程度）

① 整備状況

各病棟（5病棟）に2～3室、PICUに1室の合計12室

うち陽圧もかかる部屋が2室

② その他

実際に陰圧をかけることは多くないが、隔離部屋としての使用頻度は高い

（3） C病院（200床程度）

① 整備状況

外科系病棟1部屋、内科系病棟2部屋、PICU1部屋、外来診察室1部屋

内科系病棟以外は前室なし

② その他

水痘、麻疹、結核への対応として整備

（4） D病院（400床程度）

① 整備状況

病院全体で21部屋（手術室2部屋を含む）、すべて前室あり

② その他

水痘や帯状疱疹などの空気感染への対応として整備しているが、陰圧は不要でも個室管理が必要な感染症患者にも使用している

疑ったら感染個室という対応ができるため、使用頻度は高い